令和４年度　日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立大久保中学校　教諭　飯塚　絹代

１　派遣期日　令和４年 10 月 13 日（木）～10 月 14 日（金）
２　派遣先　学校名　群馬大学共同教育学部附属中学校
所在地　群馬県前橋市上沖町 612
https://jhs.edu.gunma-u.ac.jp/cms/?p=3958

「生徒一人一人の学びを最大限に引き出す授業の創造」
－ＩＣＴを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実に向けた実践を通して－

３　研修内容
（１）視察校における研究への取り組み
群馬大学共同教育学部附属中学校では、令和３年度から、「学びの質」を高めるための手立てとして、各教科等における１人１台タブレット端末の効果的な活用を目指した。実践を行っており、その成果として、ＩＣＴの活用による「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現が「主体的・対話的で深い学び」につながったと前年度の研究発表でも報告されている。しかしながら、１人１台タブレット端末の活用を学習過程の各過程に位置付けることや、各教科等の特質に応じた活用を模索する必要があるなど一定の課題も見られた。そこで令和４年度の教科教育研究では、「生徒一人一人の学びを最大限に引き出す授業の創造」－ＩＣＴを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実に向けた実践を通して－というテーマで研究に取り組んでいる。そして、主体的・対話的で深い学びの実現を目指し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体として充実させるためのＩＣＴ活用に向けて、各教科等で「問題解決の過程」にＩＣＴの活用を位置付け、教科や学年の枠を越えた汎用性のあるＩＣＴ活用を実践している。さらに、課題の解決に向けて見通しをもち、目的に応じて情報を収集、精査したり、他者との協働を通して自らの考えを形成し、再形成したり、自己の学びを振り返り、調整したりしながら、よりよい解決策を模索し、学び続ける生徒の育成を各教科がチームとなって取り組んでいる。

（２）　公開授業の見学
第２学年の理科の学習「血液の循環」の公開授業では、心臓のつくりを理解する内容であった。まず、「個別最適な学び」と「協働的な学び」は相反するものであるが、それらを同時に行うことで学びを深めることができるという理論で授業が展開されていた。実際に生徒の様子を見ると「マイ探究シート」を使用し、「個別最適な学び」を行っていた。「個別最適な学び」とは、生徒一人一人の特性・学習進度・学習到達度を図るための学びの場である。この単元の初めに自分自身でテーマを決め、「マイ探究シート」にテーマに基づく予想と今後の学習で深めていきたいことを記入していた。どのように学習をすれば課題を解決できるかという視点で単元の目標を決めており、指導者が指導法・教材等の工夫を行うことで見通しをもって、課題解決を行い、自己調整しながら学習を進めている様子が見られた。また、工夫点として「孤立した学び」に陥らないように、ブタの心臓を使ったり、補聴器を用いて自分の心臓の鼓動を聞いたりするなど、探究的な活動を通じて考えを深める「協働的な学び」の充実を図っていた点も非常に印象的であった。また、異なる考え方が組み合わさり、よりよい学びを生み出されるような協働的な学びができるグループ活動の場の設定も授業内に計画的に組み込まれて

図１ブタの心臓を観察している生徒の様子

社会科部の授業では、単元ごとに問題解決の過程を「つかむ」「追究する」「まとめる」

の３つの構成で次の学びへ学習を進めるという授業を行っていた。生徒自身もこの３構成の流れをつかんでおり、スムーズに授業展開がなされていた。「５年後のＥＵはどうあるべきか」という教科書にはない質問を生徒に問いかけ、考えさせるという授業内容で、あらゆる視点で資料が準備されており、教師の授業に対する思いや工夫を感じた。専門家や多様な他者との協働的な活動を通して新たな視点や立場の気付きを持たせ、多面的・多角的に考察する力を高め、課題解決への意欲を継続し、自ら学習を調整しようとする力に結び付けていた点など学ぶべきことが多くあった。また「個別最適な学び」と「協働的な学び」は、それぞれが個別に行われるのではなく、「スパイラル」しながら一体的に充実し深まっていくイメージであると研究協議の際に言われていたことが今後の授業を構成する上での参考になった。

（３） 文部科学省による講演（「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりを考える）

講演では新学習指導要領の改訂のポイントについて述べられており、重要なポイントは「教師が教える」スタイルから「子供たちが学ぶ」スタイルへ変容をさせていかなければいけないということであった。また、「何を知っているか」という学力観だけでなく「どのような問題解決を成し遂げられるか」という学力観が重要であり、我々教育者の担うものであるとも述べられていた。さらに、授業の前に必ず意識してほしい授業デザインのための「視点」として、次の４つが示された。

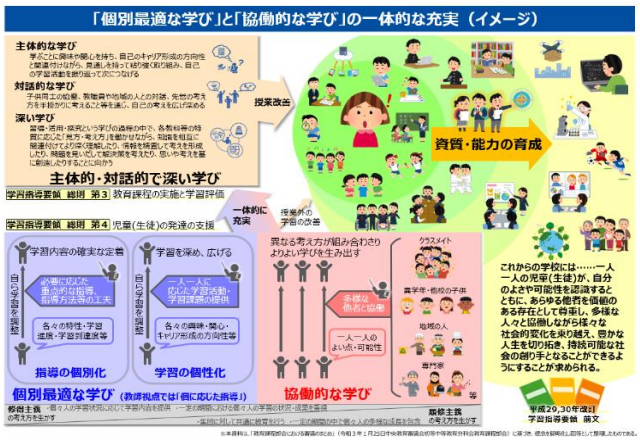

図２「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実（イメージ）

【１】　この授業の本質は何か
【２】　この授業で身につけさせたい能力は何か
【３】　その能力が育成できたかをどのように評価するのか
【４】　そのためにどのような環境づくり（問いかけ、準備、支援など）を行うのか

この４つの視点をもつことの大切さについて講演をいただき、授業作りの参考になった。

４　感想

各教科部とも、身に付けさせたい資質・能力を明らかにして、ねらい（課題）を達成させるためにより効果的な手段や方法を模索し、事前準備が徹底していた点は、大変勉強になった。社会科部による公開授業では、参考資料を使用する場面が見られたが、それらの資料は専門家の意見や航空会社、県職員など様々な視点で資料が用意され、それによって生徒が課題解決への意欲を継続させることができ、自らの学習の学びを調整できる力が身に付いていくものであると強く感じた。また、事前準備の必要性について改めて実感できた。ＩＣＴの活用については、「目的」ではなく、「手段」としての活用が学校全体で意識されており、どの生徒もＩＣＴの活用に戸惑いなく、１つの学習のツールとして使いこなし、より効果的な学習を行っていたことがとても印象的であった。また、毎年、学校側でデータベースの改良を加えており、ＩＣＴ活用研修も充実され、学校全体で取り組むことの大切さを実感した。多面的な考察ができるようになることで、さらに、新たな価値や概念に関する知識の習得、具体的な事実に関する知識の習得ができており、課題を主体的に解決しようとする態度の育成や持続可能な未来を構成する力へと結び付けられるのだと視察に参加し、強く感じた。今回の研修に行かせていただいたことに感謝するとともに、教科指導や学級経営にさらに努めていきたい。